



壇場伽藍高野明神前の二犬の石像

# 震宝館だより

題字・奮野光義師

霊宝館だより 第92号

平成21年8月13日発行

和歌山県伊都郡高野町高野山306

(財)高野山文化財保存会

高野山霊宝館

電話0736-56-2029

URL <http://www.reihokan.or.jp>

## 利用案内

■開館時間

5月1日～10月31日

8時30分～17時30分

■休館日

年末年始のみ

■拝観料

■専用駐車場あり

大人 600円

高・大学生 350円

小・中学生 250円

第30回高野山大寶蔵展

## 高野山の名宝

開催中 9月27日(日)まで

第30回大寶蔵展 高野山の名宝

山内寺院の秘宝

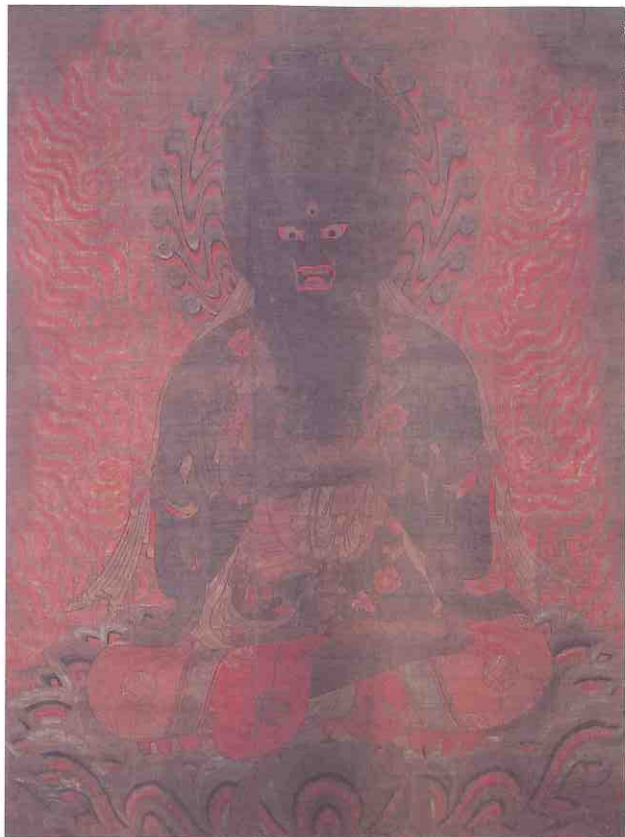
期間 9月27日(日)まで

高野山霊宝館では毎年夏期に、大寶蔵展と題し、高野山の名宝を多数紹介する展示を開催しております。

これまで、第二十七回と第二十九回の二回にわたり、山内塔頭寺院に伝わる秘宝を、寺院別に紹介してまいりました。第三十回を迎える今年も、山内塔頭寺院シリーズの最終回として、十七カ寺の宝物を中心に出版いたします。

今回の展示の筆頭に上がるのが、五大力菩薩像の揃い踏みです。国宝の三幅と重文の四幅が一堂に。仁王会の会場に招かれたかのような雰囲気、この機会にぜひご堪能ください。

また善女竜王像、諸尊仏龕、八大童子立像(六軀)などもあわせて展示いたします。



国宝 五大力菩薩像(有志八幡講十八箇院)のうち金剛吼菩薩像

【主な出陳品】

国画

絵画 五大力菩薩像

有志八幡講十八箇院

善女龍王像

金剛峯寺

彫刻 八大童子立像(八軀の内六軀)

金剛峯寺

諸尊仏龕

金剛峯寺

書跡 文館詞林残巻

宝寿院

(正智院所有分は今回出陳していません)

源義経書状 宝簡集巻第三十三

金剛峯寺

重要文化財

絵画 五大力菩薩像

普賢院

弘法大師像

龍泉院

恵果阿闍梨像

西生院

伝熊野曼荼羅図

龍泉院

高野大師行状図巻第六

地藏院

不動明王二童子毘沙門天図像

地蔵院

山水屏風

円通寺

丹生高野明神像(問答講本尊)

金剛峯寺

丹生明神像・狩場明神像

金剛峯寺

如来像(伝薬師如来像)

金剛峯寺

文殊菩薩及使者像

遍明院

如意輪観音坐像

如意輪寺

毘沙門天立像

多聞院

不動明王立像(帆不動)

蓮上院

工芸 花文刺繍打敷

全光院

書跡 細字金光明最勝王経

金剛峯寺

即身成仏品

金剛峯寺

町石建立供養願文

金剛峯寺

聖観音造立願文

金剛峯寺

紺紙金泥般若心経(霊元天皇宸翰)

金剛峯寺

後小松天皇宸翰秘調伝授書

金剛峯寺

増菴阿含経巻第三十二

西南院

往生瑞応伝

金剛峯寺

日本法華験記

宝寿院

十巻抄

宝寿院

景指定文化財

巴陵院

工芸 金銅五鈷鈴

巴陵院

平常展も同時開催

高野山霊宝館 次回展のお知らせ

秋明企画展

山岳信仰と高野山

2009年 10月3日(土)~12月13日(日)

### 収蔵品の紹介 66

重要文化財

## 五大力菩薩像 五幅

普賢院 紙本墨画 鎌倉時代

金剛吼 縦375.7cm 横225.2cm

他各 縦316.5cm 横166.1cm

(今回の大寶蔵展では無量力吼像は展示いたしません)



竜王吼



金剛吼



雷電吼



無畏十力吼



無量力吼  
(今回展示していません)

五大力菩薩という名前はあまり聞き慣れないかもしれませんが、五大力菩薩は鳩摩羅什(三四四〜四一三年)が漢訳した護国經典「仁王般若波羅蜜經(旧訳仁王經)」に説かれるほとけで、金剛吼菩薩・竜王吼菩薩・無畏十力吼菩薩・雷電吼菩薩・無量力吼菩薩の五尊からなります。金剛吼は三目、他は二目二臂で、菩薩ですが忿怒相(怒りの表情)をあらわします。これは密教の影響を受けたためで、同経を不空(七〇五〜七七四年)が新たに漢訳した經典(新訳仁王經)、さらに不空訳「仁王念誦儀軌」を経て、五大力菩薩は五大明王(不動・降三世・軍荼利・

大威徳・金剛夜叉)へと発展しました。そのため五大力菩薩像の遺品はあまり多くありません。本図は紙に墨線で描かれ、目や口のみは赤色を加えられています。金剛吼は正面向きで蓮華に座り、他の四幅より大きな紙に描かれています。他の四菩薩はそれぞれ異なる持物を持つて構え、片足を上げて右あるいは左を向きます。銘によると建久八年(一一九七)、豊前五郎為広によって描かれたことがわかります。また「住吉大明神」とあることから元々は住吉大社に奉納されていたとみられます。注目すべきはなんといつてもその

大きさです。金剛吼菩薩像だと縦四メートル近く、横二メートル以上にもなり、これらが並ぶ部屋では巨大な姿、鋭い眼光に見下ろされ、足がすくむような、護国のほとけとあつて頼もしいような、そんな思いがします。平成九〜十三年にかけて行った修復・表具交換にかかった費用は五幅で約三九〇万円だそうで、そういう点からもスケールの大きさを感じさせられます。今回の展示では国宝の絹本着色五大力菩薩像三幅(二幅は明治二十一年焼失)と共に展示いたしますので、是非ご来館いただき、その迫力を体感してください。(F)

## 高野山の名鐘

## 其の14 円通寺の鐘（本堂）

円通寺の楼門の鐘は以前に紹介しました。円通寺の本堂にはもう一つ鐘があります。これはお勤めを始める際に合図として鳴らすもので、八センチほどの小型の鐘です。しかしこの鐘にも銘文が刻まれており、円通寺の歴史に関わる人物の名が記されています。

願諸賢聖／同入道場／願諸悪趣／俱時離苦／于時寛文拾庚戌年／五月吉日

為顔月妙林菩提／建立之／高野山

眞別処／圓通寺常住／再興願主比丘  
快圓／冶工泉州堺住／菊並相模藤原宗次

以前にも紹介しましたように、円通寺は東大寺の再建に際して大勸進職をつとめた事で有名な重源上人が賢俊良永律師を招請して再興されました。その後、真政圓忍律師が再建をはかられて、二世となり、寛文元年（一六六一）に弟子の快圓慧空律師に譲られました。ここでいう律師とは現在の僧階としての律師では



円通寺鐘全体



円通寺仏堂

なく、「戒律」に通じ、その戒律を堅持した僧侶のことです。

日本の戒律は、奈良時代に中国から鑑真が伝えたことにはじまります。鑑真は東大寺に戒壇院を設け戒律授与の場を整え、戒律持戒の重要性を広めました。しかし平安時代を経て、戒律は正式な僧侶となるための儀礼として形骸化していき、鎌倉時代中期に叡尊（興正菩薩）が密教と律字を研究して、戒律による社会救済を志し、戒律の復興と社会救済事業に努めました。そして、密教の教義に基づいて戒律を修める、真言律宗を興されました。（明治までは真言宗の一派とされています）

したが、明治二十八年（一八九五）に真言宗より独立しました。また近世になって、承応三年（一六五四）に来日された隠元が戒律を重視したことにより、日本の仏教において再び戒律が盛んになりました。

このような時勢のなかで、厳しい戒律を修めるにふさわしい閑寂幽邃の地にある円通寺の復興は大いに意味のあることであつたと思われま

す。

さて、話を円通寺の鐘に戻します。銘文の「願諸賢聖 同入道場 願諸悪趣 俱時離苦」は先人の研究によると南北朝時代以降の鐘銘にしばしば用いられる偈で、聖人賢者が集い仏道に励み、苦しみの世界にいるものが共に苦しみから逃れる時が来るように、というような意味です。そして寛文十年（一六七〇）五月に顔月妙林の菩提のために高野山眞別処（円通寺）の住職快圓が堺の鑄物師、藤原宗次に依頼して鐘を造つたことが刻まれています。この鐘を奉納した快圓が寛文元年に円通寺を譲られた快圓慧空です。

快圓慧空は徳島の出身です。寛文十年（一六三三）に誕生し、十七歳（十一歳との史料もあり）で剃髪、十九歳で高野山に登り密教を修学されます。その中で戒律の重要性を認



快圓慧空師坐像 光明院蔵 寛文十三年（1673）  
写真提供/勸元興寺文化財研究所

識され、円通寺にて真政圓忍より戒律を学ばれました。そして寛文元年、二十八歳の時に円通寺を譲られました。寛文七年（一六六七）には荒廢していた堺の神鳳寺の再興に尽力されます。そして円通寺を神鳳寺の末寺とされました。快圓慧空は他にも多くの寺院を再興し、神鳳寺の末寺とされました。延宝四年（一六七六）の「神鳳寺末寺帳」には高野山の円通寺を筆頭にして四十二の末寺が記されており、そのうち十一の寺院を快圓慧空が兼務されています。この史料には関東の江戸や駒込にも兼務寺院があったことが記されています。円通寺に残る位牌には

快圓慧空和上  
正徳壬辰二年二月初八日寂  
とあり、正徳二年（一七一二）二月八日に七十九歳で遷化されたことが分かります。  
神鳳寺は鳳神社の神宮寺であったために、明治の神仏分離によって廢寺となつてしまいました。その時、神鳳寺の仏像や記録などの宝物は末寺であった堺の光明院に引き継がれました。現在は高野山真言宗の寺院である光明院には神鳳寺の宝物とともに、快圓慧空のお像が残されています。牀座（椅子）に座して威儀を正されたそのお姿はまことに威厳があります。一点を見つめ、深慮され

ているような切れ長の目、引き結ばれた口元など、端正なお顔立ちには氣品が感じられます。この像には寛文十三年（一六七三）の墨書があり、快圓慧空四十歳の時です。円通寺の鐘の奉納が寛文十年（一六七〇）です。すから、ちょうど同時期のお姿であると思われま。厳格な戒律を修め、多くの寺院の復興にとめられた高僧としてのお姿は、拝するこちらの背筋までピンとさせるような威厳を

感じます。  
現在、円通寺には高野山事相講伝所が置かれ、今でも厳しい修行の地であります。日々のお勤めが始まるときには必ず修行僧がこの鐘を撞きます。そして堂内には本尊の釈迦如来像をはじめ多くの仏像とともに、中興の賢俊良永律師、真政圓忍律師、快圓慧空律師のお位牌が安置され、修行に励む僧侶たちを見守っております。  
(K)



于時寛文拾庚戌年  
五月吉日

願諸賢聖  
同入道場  
願諸惡趣  
俱時離苦



再興願主比丘快圓  
冶工泉州堺住  
菊並相模藤原宗次

為顔月妙林菩提  
建立之  
高野山眞別処  
圓通寺常住

# 高野山の文化

## 高野山の明神信仰

前奥之院維那 日野西 眞定

### (一) 高野山の丹生・高野両明神の発生

#### (2) 狩場明神

弘法大師空海は、弘仁八年(八一七)に結界が終わると、その中に金剛峯寺の建立にかかった。『南山記』によると、同十年五月三日に、先ず地主神を祀り、次いで六月一日から大塔の建立にかかったとある。建立の場所は、密教の堂塔伽藍を建立するために二度目の結界を行った壇場(壇上とも書く)であるが、地主神(鎮守社)の高野明神社を最初に建て、これらの安泰を祈っている。

私はかつて、自坊(兵庫県豊岡市)がある但馬地区の「屋敷神」の調査を行ったことがある(「但馬に於ける地神の研究」『日本民俗学』昭和四十七年七月号)が、先ず家を建てる前に屋

敷神を祀りその安泰を祈ることが、現在でもよく行われている。この信仰は平安時代初期でも行われていたと考えられるが、弘法大師空海も、先ず高野明神社を建立し、これから建立する密教の堂塔伽藍の永遠の安泰を祈ったと思われる。

高野山上には、「南山の犬飼」と自称する狩人姿の行者達によって、山麓天野大社の祭神「丹生明神」が祀られていた。弘法大師空海がこの時建立した「高野明神社」には、この「丹生明神」に、「狩場明神」を加えて二社とされたと考えられる。弘法大師空海以下その弟子達にとっては、先輩に当たり、これまで山の神として祀られて来た「丹生明神」を祀って来た人達を神

格化したものである。今後は、祀り手は弘法大師空海以下の密教徒に代わるのである。

問題の「狩人」の姿を明らかに記しているのは、『金剛峯寺建立修行縁起』である。この『縁起』は、「康保五年(九六八)」に「ある隠士」によって書かれたとするが、高野山の最も古い時代のことを知る手掛かりとなる書である。同書には、

- ①「弘仁七年(八一六) 猛夏ノ比ヲ以テ、城外ニ出テ経歴ス矣。大和国宇知郡ニシテ、一人ノ獵者ニ遇フ」
- ②「骨不高く筋ヲ太クシテ、弓箭ヲ以テ身ニ帯ス。大小ニツノ黒犬之レニ随従ス」
- ③「獵者ノ云ク。我ハ南山ノ犬飼ナリ。」



写真1: 二匹の黒犬を連れ、空海に出会っている (地藏院蔵「高野大師行状図画」巻第四)



写真2：狩場明神像 金剛峯寺蔵（鎌倉時代）

山地万許町ヲ知ル所口ナリ。其ノ中ニ於テ幽平ノ原有リ。靈瑞至テ多シ。和尚来住シタマヘ。自ラ以テ助成セム。犬ヲ追放テ走ラ令ルノ間、即チ失ヌ」④「故ニ六月中旬ヲ以テ、表請シテ入定ノ処ヲ点ズ。一兩ノ草庵ヲ作ル。（中略）彼ノ登山ノ路辺ニ（中略）、丹生ノ大明神ノ社也。今、天野宮ト云フ是也」

①弘仁七年に、弘法大師空海は、高野山を政府から戴く時に、大和国宇智郡に行っている。このことは大きな問題として取り上げなければならぬので、後に項目を設けて考えることにする。

②ここで一人の獵者（獵師）に出会うが、骨ががちりしており、肉付きもたくましく、弓・矢を持ち、二匹の

黒色の犬を連れているとある。これが現在見られる「狩場明神」の姿である。この人達が弘法大師空海をはじめとする真言密教の僧が高野山に住する前に、高野山に住していたのである。

ただ、二匹の犬は「黒犬」とあるが、現存のものでは、白・黒の二犬が描かれている。この点『高野山時報』（平成二十一年六月十一日・二十一日の両



写真3：狩場明神像 龍光院蔵（鎌倉時代）

号）に掲載した「高野山の女人禁制」に詳しく記しておいたが、梅津次郎先生の『弘法大師伝絵巻』（角川書店刊）によると、『弘法大師行状絵巻』の中では、仁治三年（一二四二）から文永九年（一二七二）に成立したと考えられる、高野山地蔵院蔵の『高野大師行状図画』が、もっとも古いとある。この『図画』には、獵師の連れた二匹の犬は共に、「黒犬」である（写真1）。

しかし、その他の『弘法大師行状絵巻』では、白・黒となっている。白には貴い物という觀念があり、色からいっても安定感があり、実際には、その後はこの色で描かれるようになったものと思われる。

現存の狩場明神像は、鎌倉時代に描かれた金剛峯寺本・龍光院本が知られるが、共に白・黒二犬となっている（写真2・3）。しかし『行状絵巻』の

ケースから考えると、二黒犬であった時代があったのではないかと考えられることを記して置き度い。

日本の山岳霊場では、動物を山の神の使いとみる流れがある。比叡山は猿、伯耆の大山・三峯山では狼（山犬とも呼ぶ）であるが、高野山では犬である。この犬が、弘法大師空海を高野山に導いたと伝えるので、「導き犬」と呼ばれている。

江戸時代には、『紀伊続風土記』（五・三三八〜九頁）には、「御社神犬」の項によると、壇場（上）の御社の前には、常に白黒二犬が飼われており、修理方から養い料三石が与えられ、この世話をする駄仕もいた。もし神犬が欠けると、すぐに美しい姿のが補充された。別に僧侶や里人の中で、神犬を献ずることを望む人があると、「白米五器と青蛭（水中の虫の一種）百銅」を付けるのが仕来りとなっていたとある。新しい仲間入りが行われる時には、駄仕が御飯を炊いて神前で与えるが、明神社の鐘を一打すると、神犬達はすぐに仲良くなり、神前や壇場（上）を走り回っていた。もし、牝犬が仲間に入ることがあると、駄仕が捕えて遠く下山に放ちに行ったとある。

現在でも、高野明神社前には、狛犬ではなく、黒白二匹の石造の犬が祀ら

れている（表紙写真参照）。「犬」の  
 供養碑には、拙著『高野山古絵図集  
 成』には次の三つがある。江戸時代  
 中期の西南院蔵「高野山及び周辺の  
 絵図」には「犬廟石」（写真4）、宝  
 永四年（一七〇七）金剛峯寺蔵「奥  
 院絵図」には「犬之石」、寛政五年

（二七九三）持明院蔵「高野山奥院  
 総絵図」には「犬石」とある。名称  
 も時代が下ると共に簡単になってい  
 る。『紀伊続風土記』（四・一五三頁）  
 には、これを「明神犬石」と呼び、  
 元應二年（一一三〇）の年号も刻ま  
 れていたとある。



写真4：犬廟石「高野山及び周辺の絵図」西南院蔵（江戸時代中期）

犬については以上であるが、ここ  
 で問題になるのは、「南山の犬飼」  
 と呼ばれる獵師達をどう考えるかだ  
 あるが、後に修験道の行者として発  
 展していく「原始修験者」と宗教史  
 的には位置づけたらよいのではない  
 かと考える。

④これら獵師達は、山王即ち「山  
 の神」として丹生大明神を祀ってい  
 るが、もとは天野宮である。高野山  
 は弘法大師空海が入山し金剛峯寺を  
 建立するまでは、天野大社の配下の  
 人達によって祀られていたのであ  
 る。天野大社の丹生明神は、水神的  
 要素が強かったが、その神を山の神  
 として高野山では祀っていた。こう  
 という点もあって、弘法大師空海は、  
 山の神の丹生明神に、これを今まで  
 祀って来た獵師達を「狩場明神」と  
 し、新しく二社とし、今後は真言密  
 教の自分達が祀るということを明ら  
 かに示されたものと考えられる。

③ 待乳峠の信仰的意義

『金剛峯寺建立修行縁起』の記述  
 でもっとも注目されることは、①に  
 ある大和国宇智郡で天野大社系の獵  
 師に会い、真言密教の根拠地とする  
 高野山をその獵師達から譲り受けた  
 ということである。勿論、これは宗  
 教関係の権利の問題である。ここに

これを記念して犬飼山転法輪寺が  
 建立されている。

この地は、親王院蔵『四社明神私  
 考』には、「宇智郡待乳峠」とあり、  
 今は峠の下方に降りているが、も  
 とは山中の道脇に存在していた。また  
 蓮金院秀伝の記した「丹生大明神儀  
 軌」には「両峯結縁ノ為メニ、先ヅ  
 葛城二入ル」とある。この両峯とは、  
 大峯山と葛城山とを指す。ここは、  
 この修験道の両大拠点の境に当たる  
 のである。修験道の立場からこの両  
 拠点と結縁をする必要があるが、葛  
 城山脈の方を重んじ、先ず葛城山に  
 入峯することにしたというのであ  
 る。

『紀伊続風土記』（五・二六二頁）  
 によると、高野山の僧の入峯は、平  
 安時代には、天野大社を出発、大峯  
 ー熊野ー葛城の三つの大峯を廻って  
 いたが、当山派十二大先達の中の一  
 つと定められた「嘉暦元年（一一三  
 六）、法印檀親の時」に、高野大先  
 達とは別に、「葛城（正）大先達」  
 を任命し、葛城入峯を始めたことあり、  
 これは明治初年まで続けられてい  
 た。但し、この三山を巡る行は、高  
 野山ばかりではなく、徳永誓子の  
 「修験道当山派と興福寺堂衆」（『日  
 本史研究』四三五号）によると、興  
 福寺堂衆（高野山では「行人方」に



当たる)も、南北朝時代から近世まで行っていたと報告しており、入峯の基本的なあり方であったと考えられる。なお、「葛城正大先達」は、一般の修験道史料には見られなく、金剛峯寺内で独自に任命した先達のように考えられる。

天野大社境内には、鎌倉時代の正応六年(一二九三)・正安四年(一二三〇)・文保三年(一二三九)、南北朝時代の延元元年(一二三六)建立の四基の石造長足型五輪塔型碑伝が現存している(写真5)。石造碑伝としては一級の学問的価値のあるものである。

この中で特に注目されるのは「大先達阿闍梨名」である。「幸明前執行代・定慶前執行代・覚和前執行代」と執行代在任中の「泰助先達阿闍梨」の名前が確認される(次頁表参照)。この時代の「執行代」は現在よりも重い存在で、金剛峯寺内では、最高が「掬投」でそれに次ぐ第二位の役職であった。特に「覚和(一二六〇)〜(一二三四)」は、鎌倉時代の学僧の中で「高野八傑」の中の一人と称讃される程の存在であった。

鎌倉時代の三基では、天野を出立する日も、四月二十一日で、帰山す

るのは六月十八日で、前記したが大峯―熊野―葛城を二ヶ月近くかかって入峯をしていた。入峯者数も九十六人・一〇三人・一八五人と大勢であった。正応六年にこの入峯が始められたことは、同四年に『金剛峯寺年中行事帳』が衆僧の意見をまとめて記録されている。金剛峯寺の年中行事についてのもっとも充実した記録である。このことが影響していると考えられる。

南北朝時代の延元元年(一二三六)には、前記した『紀伊続風土記』に「嘉暦元年(一二三六)から、大峯―熊野―葛城の三山巡りは止め、大峯小篠で行われる当山派十二大先達の会合に出仕する高野正大先達と、葛城正大先達に従って葛城入峯をするグループの二つに分かれて行動するようにになった」とあるが、これが影響してか、出発の日も九月二十八日になっている。さらに、その後の石造碑伝は建てられていないが、縮小か或いは廃絶したか明らかでない。しかし、これに代わって葛城入峯に力が入られたことは明らかである。

以上、少し長過ぎたが、奈良県宇智郡待乳峠は、修験道的立場から見ると、大峯山と葛城山脈との境に存

在する重要な地点にある。というより、その高野山側の境を示す場所を示している。金剛峯寺を建立するたに弘法大師空海は開山に当たりここを訪れ、天野大社を本拠とする獵師から、この山を譲り受けて後も、この峠は重要視され、弘法大師空海が与えた薬を売る者もいたと伝えられ、さらに江戸時代にも、奥之院で売っていた葬式の時に使ったと思わ

れる「金剛草履」を、ここでも売っていたという伝承を聞くことが出来る。この峠から以内の葛城山脈は、弘法大師空海が金剛峯寺を建立してからは、同寺の宗教的勢力下に入ったが、それ以前は天野大社の勢力下にあったことも考えに入れて置かなければならない。



写真5：天野大社(丹生都比売神社)境内の碑伝

天野大社境内の碑伝

※記入のない欄は判読不可

	(鎌倉時代)			(南北朝時代)
	①1293 (正応6) 年	②1302 (正安4) 年	③1319 (文保3) 年	④1336 (延元元) 年
願 意	一乗文書写百部 衆生利益	一乗文書写百部 金輪宝祚 土民安全	一乗文書写百部 法花密行二十一日 衆生済度	得無上覚
大先達	大先達阿闍梨 幸明 前執行代	大先達阿闍梨 定慶 前執行代	大先達阿闍梨 覚和 前執行代	先達阿闍梨 泰助 執行代在任中
建立日	四月二十一日	四月二十一日	四月二十一日	九月二十八日
施主 (紙素)	紙素千日行者 秀慶等	施主千日行者 定胤等	紙素千日行者 定胤等	三度行人 定胤等
勸進聖	十二人	三十人	三十人	九十人以上力
道場聖	二十人	五人	五十人	
馳 仕		二十三人	三十五人	
檀那 (維那)	檀那 十一人	維那 三十人	維那 三十人以上	
塔婆願主		五十人	欠力	石工大工國長
入峯者	九十六人	一〇三人	一八五人	
出峯 (蓮花会)	六月十八日	六月十八日	六月十八日	

(日本山岳修験学会 第20回宇佐・国東大会 <平成11年11月> 発表資料より)

包紙

①



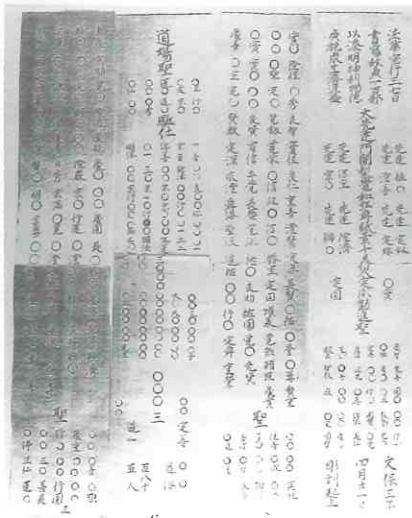
『天野社地内塔石名』正智院蔵  
ここに紹介する『天野社地内塔石名』は、正智院蔵である。同院住職であった乗如は、『紀伊統風土記』の「山主檢校次第」によると、第三百五十八世で、文政十一年（一八二八）から三年一期、檢校を勤めたとある。師は、『同風土記』の中で、学侶方全般をまとめた「学侶事歴」を記述している。その原本は現在在は親王院所蔵となっており、同院院主安田弘仁師と相談の上、出版の計画を進めている。

そういう関係で、正智院には膨大な調査資料が存在している。これもその一つであるが、師は実際に天野大社に行き、石塔に刻まれた一字一字を丹念に読まれている。その努力には敬意が感じられてならない。

②



③



④



霊宝館の庭園

# アオキ・青木・あおきば・青木葉

元高野山高等学校長 亀岡 弘昭

アオキは、ミズキ科・アオキ属の幹丈が二メートルほどになる常緑低木です。

アオキという和名は、この木の葉も枝も幹も、夏から秋の果実も青(緑)色であることに由来します。

学名の、アオクバ・ジャポニカ・ツンベルグは「スエーデンの医師で植物学者・北欧では最も長い歴史のあるウプサラ大学の教授であったカ

ール・ピーター・ツンベルグが命名した日本特産の青木葉」という意味をもっています。青木葉は、日本の広い地域(和歌山県下でも)で、この木をあおきば、と呼んでいたことによるといいます。

関東地方では自家製の味噌を仕込むおり、カビ(有害な菌)の発生を防ぐため、この葉で覆ったというので、みそぶた、みそっぱ、南九州で

は、やまたけ(山竹)などという方言名もあるそうです。古書には、阿平木波、阿波岐、阿波木などと書かれています。わが国では江戸中期から植栽もはじまり、一七八〇年代にはヨーロッパにも渡り、日陰を好み、公害(煙害)や病虫害にも強いため公園や庭園の樹下などに植えられ、観賞されていると言います。国の内外で園芸品種も多種、つくりだされています。

この木は雌雄異種で雌木と雄木があり、春、それぞれに雌花と雄花が咲きますが、雌花の花序は小さく塊状になって目立ちませんが、花後に実をつけます。この果実について、大抵の紹介書では冬に赤熟するとあり、手元に十二月から五月頃が赤熟する時期とされているものが、一冊あります。

今年の六月十二日(金)に、高野山霊宝館の館庭林内で赤く熟した実をつけた株を観ることができました。

アオキの生葉は民間の薬としては



赤熟した果実

手の平で揉んだり、すり潰したものを腫物・火傷・創傷などに塗布、腹痛にジュースを、神経痛に干した葉を煎じて飲用したなどがあります。

高野山では樹林内の比較的肥沃な日陰地に自生し、植え育てられているものも。

霊宝館の館庭林内には個性のある大小のアオキが沢山あります。これらの潤いのある青(緑)の葉群れは、爽やかな気分にさせてくれます。

高野山で製られている胃腸薬・「大師陀羅尼助」の表示されている三つの薬材のうちの一つに、この青木(アオキ)があげられ、健胃整腸の薬効があるとされています。

青木葉を摘み採り、十〜十五日陰干しすると、墨を塗ったように黒変するというのも体験しました。



葉も枝も果実も青(緑)



淡紫褐色の雄花

## コラム

## 「海を渡ったお猿さん」

五月某日、米国・ロサンゼルス・カウンティ・ミュージアム (Los Angeles County Museum of Art) の関係者御一行が当館に来訪されました。その際、本館の展示を観覧される中で、日本美術学芸部長 (Curator of Japanese Art) をしておられますロバート・シンガー氏に、非常に興味深いお話を伺うことが出来ましたので、ご報告したいと思います。

氏が館内拝観中、当館収蔵の宝寿院蔵楊月作『瓜・竹の子図』の二幅に眼を留められ、「カウンティ所蔵の楊月作『猿猴促月図』にとても

よく似ています。印章も同じではないでしょうか」と仰いました。『瓜・竹の子図』は現在は二幅一對として収蔵していますが、元々は三幅一對で、中央幅に『猿猴図』があったと伝えられています。その旨を知られたシンガー氏は、「もしかしたら、カウンティ所蔵の『猿猴促月図』がそれに当たるのかもしれないね。」と感想を述べられました。

このお言葉をお聞きして、驚きと興奮を覚えながら、すぐにカウンティ所蔵の『猿猴促月図』を調べてみました。両幅を比べると、没骨描法(輪郭線を用いずに形を表す方法)

を駆使するなど、『瓜・竹の子図』の描き方に良く似ているではありませんか。そこで、次に両幅の寸法を比べてみました。すると、

『瓜・竹の子図』(宝寿院蔵)：一〇〇・八×四〇・五 (cm) (両幅とも)  
『猿猴促月図』(カウンティミュージアム蔵)：六七・三×三八・一 (cm)

というものでしたので、一度は「違うか：」と思いましたが、さすが、『猿猴促月図』をよく見てみると、印章が半分ほど切れていることに気が付きました。ということは、本紙部分は、当初もう少し大きかったと

いうことになります。全体の構図もやや窮屈であり、猿猴の上部には『瓜・竹の子図』のように大きな余白があったことが想像できます。こう考えていきますと、カウンティ本の元々の大きさが宝寿院本と同じだった可能性が出てくる訳です。そして、氏の御教示どおり「臣僧楊月」という同じ印章が捺されています。

推理を進めると、元々高野山にあったものが、いつの時代にか離れ離れになり、流れ流れて、行き着いた先が、海の方こうロサンゼルス・カウンティミュージアムという一応のストーリーがでかかります。

ここで、少し、作者の楊月と『猿猴促月図』について説明しましょう。

楊月は、室町時代の十五世紀後半から十六世紀初め頃に活躍したように、薩摩(現在の鹿児島県)出身、後に山城(現在の京都府)の笠置寺に住み、雪舟を師として、中国の有名画家牧谿の画を学んだといわれますが、雪舟の弟子云々についてはよく分かっていません。楊月の作品は、日本にいくつか現存していて、本画と同じ「臣僧楊月」の落款が捺されている作品もありますが、『猿猴図』





左右：楊月作『瓜・竹の子図』和歌山県指定文化財 宝寿院蔵  
中央：楊月作『猿猴促月図』米国カウンティーマジューリアム蔵  
Photograph ©2009 Museum Associates/LACMA

は知られていません。

「猿猴促月」という画題は、中国の故事に由来します。水面に映った月を見た手長猿が、本物の月と思い、月を捉えようとする場面が描かれています。猿はこの後溺れ死んでしまいます。この故事は、身の程をわきまえず大きなことをすると失敗する。つまり、身の程を知れという意味があるようです。このような意味の画が、何故『瓜・竹の子図』と三幅対であったのかは、よく分かりません。

カウンティーマジューリアムを実際に見ていませんので、現状では何とも言うことが出来ませんし、いつ海を渡ったのか、どのような道をたどってロサンゼルスまで行き着いたのかなど、解かなければならない謎は沢山ありますが、色々と想像を巡らせてしまいます。

さて、お猿さんが再び海を渡って里帰り、いつか運命の再会となる日が来るのでしょうか。もし、元来三幅対のものであったのなら、是非並べて展示してみたいところです。

人と人の縁だけでなく、モノとモノの縁も繋がっているものだなあとしみじみ感じた一日でした。(T)

※本コラム執筆に当たっては、和歌山県立博物館伊東史朗館長に御高配賜りました。記して御礼申し上げます。

# 一枚の写真から

## 奥之院灯籠堂

今回ご紹介する一枚の写真は、高野山奥之院灯籠堂の内陣です。奥之院は、弘法大師空海が入定する聖地として、壇場伽藍と共に高野山における信仰の中核地となっています。灯籠堂は弘法大師御廟の手前に、いわゆる拜殿として建てられているもので、堂内には寛治二年（一〇八八）に白河上皇によって献じられた「白

河灯」や、お照という貧しい女性が灯した「貧女の一灯」などが消えずの火として伝わり、その他、たくさん灯籠が所狭しと献納されています。こうした灯籠自体は取り置きされるのが少なかったようで、永正七年（一五一〇）から慶長八年（一六〇三）にかけて制作された十一基の鉄灯籠のみが、灯籠堂より霊宝館

に収蔵されています。

現在の灯籠堂は、昭和四十年（一九六五）の高野山開創千五十年の記念事業の一環として建てられたもので、昭和三十七年（一九六二）に起工式を行い、昭和三十九年四月に竣工した近代の建物となります。それでも現在まで四十五年は経っていませんので、本年二月には、約五カ月をかけた改修工事が完了し、従来に比べて堂内の荘厳さが増し、そして参拝しやすくなりました。

大壇の前方に太い丸柱があることなどから判明します。それ以前の灯籠堂となると、寛永三（一六二六）年に再建された建物を基本として（写真A）、大正三年（一九一四）に増築されたものになります（写真B）。その規模は桁行七間梁行五間と記録されています。増築に際しては建物の正面中央に外陣を設け、それに伴って屋根に千鳥破風と向拝部に唐破風をつけて総檜造りの壮麗な建物となりました。

さて、写真に写る灯籠堂内陣ですが、いつ頃に撮影されたものか定かではありません。しかし、現在の灯籠堂の内陣とは様子が異なっていることがわかります。それは写真右奥に障子が写っていること、また中央

創建当時の灯籠堂から数えると、現在の建物は約十二度目の再建ということとなります。写真の内陣が大正三年改築以前に撮影されたものか、それともそれ以後なのかは不明ですが、いずれにしても江戸時代以来の内陣の様子を伝えるものとして、大変貴重な一枚といえます。

(M)



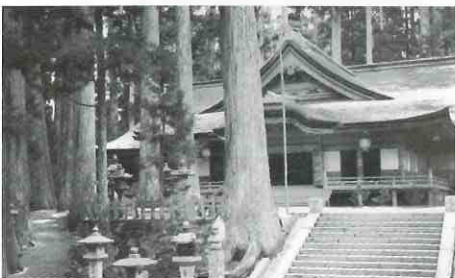
奥之院灯籠堂内陣 江戸時代以来の内陣の様子を伝える1枚の写真  
高野山報恩院山口耕俊師所蔵写真アルバムより



写真A 寛永3年（1626）再建当時そのままの様式を伝えると思われる旧灯籠堂外観



霊宝館収蔵の天正2年（1574）銘の鉄灯籠



写真B 大正3年（1914）、本屋から前面に約五間ほど張り出して外陣部が増築されました。建物正面の屋根に破風などが設けられました

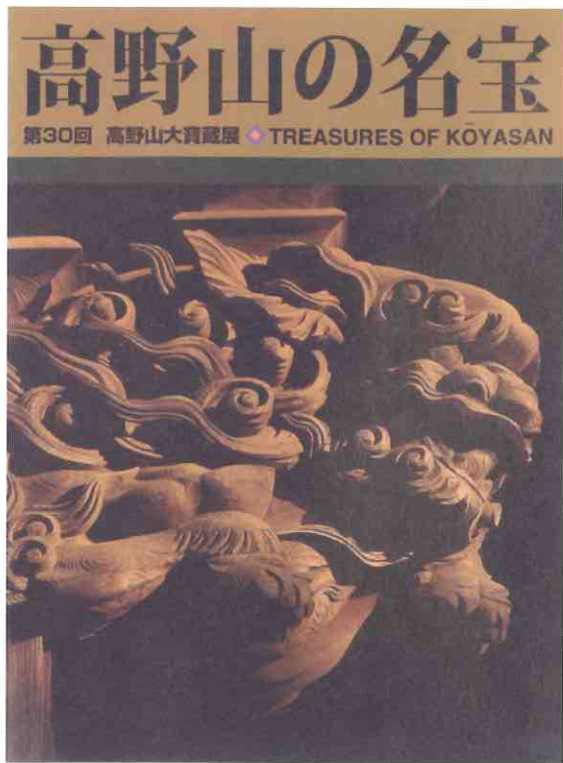


現在の灯籠堂（外観・内陣）  
昭和39年（1964）完成直後の状況

# 第30回大寶蔵展図録 好評発売中

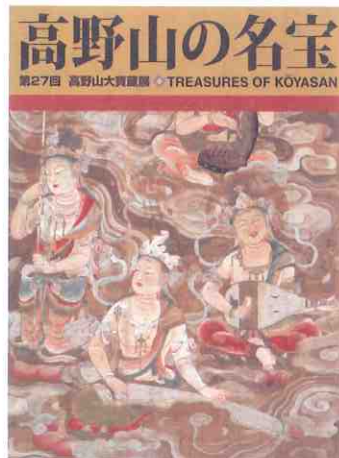
先着二〇〇名様に、八大童子クリアファイルをプレゼント!

七月十八日より始まりました第三十回大寶蔵展、図録も好評発売中です。第二十七回・第二十九回に続き、今回は円通寺を含む三十四の山内寺院の寺歴と宝物を、四季折々の写真も交えて紹介しています。高野山探訪には必携。  
巻頭では、出展中の八大童子立像（八軀の内六軀）の魅力を徹底分析。A4版、オールカラー、四十九頁。二二〇〇円。

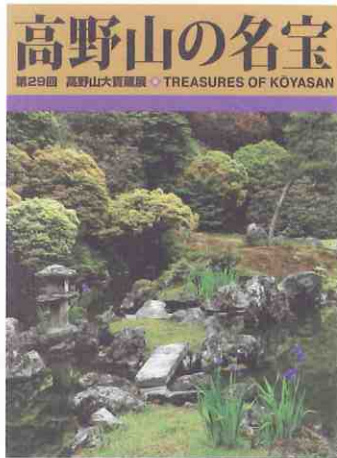


クリアファイル  
プレゼント!

大寶蔵展会期中、霊宝館にお越しいただき、第二十七回・第二十九回・第三十回の三冊をセットで購入された方を対象とします。



第二十七回大寶蔵展図録。二十の山内寺院と、一結社（有志八幡講十八箇院）を紹介。  
A4版、オールカラー、四十二頁。  
二二〇〇円。



第二十九回大寶蔵展図録。金剛峯寺を含む、十七の山内寺院を紹介。  
A4版、オールカラー、四十一頁。  
二二〇〇円。

## 恵喜童子 三〇〇円切手が リニューアル!

八大童子立像のうちの一軀、恵喜童子をあしらった三〇〇円切手、平成十四年九月まで販売されていましたが、ご存じだったでしょうか？  
このたびデザインを一新、七月二十三日（木）に再販されました。どうぞご愛顧のほどを。



旧300円切手



新300円切手

時事

天台座主半田孝淳  
猊下御一行が来館

六月十五日、天台座主半田孝淳猊下が高野山を正式訪問され、当館の展示もご覧になりました。天台座主が高野山を公式参拝するのは、真言・天台両宗の開宗以来初めてで、大きなニュースになったことは記憶に新しいと思います。

半田座主は午前中、大師教会大講堂での「宗祖降誕会」に出席、次に奥之院に参拝し、当館へは十四時過ぎに到着されました。ご高齢のため、



車椅子でのご案内となりましたが、始終、柔和な笑みを湛えつつ、細川康裕館長による展示解説に耳を傾けておいででした。

ところで当館には比叡山にゆかりのある物も収蔵されており、そのうちのひとつに室町時代の銅鐘（重文・常設展示中）があります。銘文より、永正元年（一五〇四）の铸造で、もと、比叡山東坂本の生源寺の鐘であったことが判明する貴重なものです。元亀二年（一五七二）織田信長の焼き討ちに際し、高野山谷上大日堂に移されたと伝えられています。

天台座主御一行の中には、この鐘を特に熱心にご覧になる方もおいででした。

生源寺は、伝教大師最澄御誕生の地として知られており、室町時代の十穀聖の勧進によりそこに納められた鐘が、およそ四百年の時を経て、この高野山で、天台座主御一行の目にとまったというのは、歴史の流れを顧みると、感慨深いものがありました。

霊宝館上空に不思議な虹

六月二日午後、当館南西の上空に不思議な虹が出ました。横に架かる



虹はこれまで見たことがなかったので調べてみると、環水平アーク（水平弧・水平環）というそうです。虹と同じく大気光学現象の一種ですが、虹が太陽と反対の方角に出るのに対し、環水平アークは太陽と同じ方角に見えます。水平に並んだ大気中の氷晶に太陽の光が反射したもので、太陽から約四十六度離れた位置に現れます。色の並び方は、上から赤・橙・黄・緑・青・藍・紫の順で、肉眼でもきれいに見えました。小一時間ほどして、消えていきました。

利用案内

開館時間

■ 5月1日～10月31日

8時30分～17時30分

■ 11月1日～4月30日

8時30分～17時00分

■ 休館日 年末年始のみ

■ 拝観料 大人 600円

高・大学生 350円

小・中学生 250円

■ 専用駐車場あり

紫雲放光

高野山が「紀伊山地の霊場と参詣道」として世界遺産に登録されたのが平成十六年（二〇〇四）七月、その後五年が経ち、海外からの来訪者を見かけることが多くなりました。

フランスのタイヤメーカーが今年三月に発行した旅行ガイドで、高野山が最高ランクの三ツ星評価を得た影響が、霊宝館でも特にフランスの方の来館が増えているようです。

外国の方へのバリアフリー対応としては、英語の展示リストを用意する、看板や解説文などに英語表記を併記するなどの努力はしていますが、今後の課題も多く、頭を悩ますところです。